

## 研修委員会 リレーコラム VOL.5

### 「突然の病気に、子どもたちとの別れ…」

#### それでも人生は続く

奈良 かよ子

昨夏のこと、私は突然ガン宣告を受けた。血液ガンの一種「悪性リンパ腫」。周りからいつも「元気やなあ」と言われ、回遊魚のごとく留まることを知らずに突っ走ってきた私自身が一番驚く結果だった。

二人に一人がガン罹患の時代にあって特別不思議なことではないのは知っている。でも、何故私なんだろう、何故今なんだろう…と Dr.の説明を冷静に聞きながらも子どもらのことで頭がいっぱいになった。

たしかに疲れやすくなっていた。補助者が来てくれると小一時間くらい横になることが出てきて「トシには勝てやんわ」と冗談めかして言っていたっけ。幸いにも日進月歩の医療にあって良く効く標準治療が確立されているらしく、頑張っ

治療に臨まなくては と決意した。

確定診断がおりて 2 日後には入院というバタバタ。4 週間毎の治療を 8 クール、8 ヶ月に及ぶ 3 月までの治療計画である。最初の入院は 1 ヶ月半程度で、あとはクール毎に短い入院か通院での治療になると聞き、「一時退院したらすぐに仕事復帰をしたいのですが」という私に、Dr.は「化学療法(点滴と服薬での抗がん剤治療)といえども甘く見ては駄目。しかも 24 時間 365 日小さい子どもの養育をするなんて!」と一刀両断に。

夫はというと明らかにパニックになっている。私は覚悟を決めて高校生以外の小さい子たちの一時保護を見相にお願いした。「絶対よそには行かへん。迎えが来たら立て籠もる。」と泣いて抵抗する子には、「必ず迎えに行くから3月まで待っていて」と抱きしめ、そのことを深く考えられないでいる他の子どもたちには「ドッジボールできるよ」「ご飯美味しいよ」となだめて、せわしなく実にあっけなく別れたのだった。

長期となれば学習保障のために施設への措置変更になるとは分かっていた。難しい状況にある子や通院が必要な子らは、それぞれに難しいステージに差しかかっているモヤモヤをぶつけてきていた時期でもあり、こんな大事な時期に養育者の病気入院とはいえ、唐突に別れを突きつけられる辛さを思うところも胸が痛むばかりだった。

子どもたちが帰ってくることを希望にして治療に取り組んで来たが、「緊急対応」で行われたはずの措置変更も、いつしか子どもたちが施設でそれなりに居場所を見つけて落ち着き始めていること、かといって不安定要素が無くなった訳ではないことの両方を理由に「施設処遇」へと変わっていった。

里親やファミリーホームは、家庭養護の良さと共に閉鎖性、機能の脆弱性を併せ持っている。そのことは私なりに自覚していたので、元里子を含めて3人の養育補助員を確保し、友人知人には時間を見つけて遊びに来て貰うなどオープンにしてきた。

また地元でアドボケイトが増えることを願って実習先として受け入れ、定期的に訪問して貰うなど努力をしてきたつもりだが、「養育者がこけたら、皆こけた」になってしまった。よほど危うく映っていたのだろうか。現状が「ワンオペ」養育になっていたことを突きつけられた今回の出来事だった。

実親なら再統合を目指しての取り組みが行われるが、我々はどうしても受け皿のひとつに過ぎない。あっけなく別れてしまった子どもたち・・・見相の「子どもの最善の利益の為の措置です」の言葉が私にはむなしく響くばかりだが、その通りであることを願いたい。

残っていた高校生も無事就職し自立したため、4月から我が家は本当に空っぽになった。心も『空の巣症候群』みたいな日々だが、深く深く息をすれば自然に新しい空気が体に満ちるように、いつかまた新たな出会いがあることだろう。また、年齢を考えると自分のできるファミリーホームの新たな使命を見つけしていくことも大切なのかも知れない。

今回の病気と喪失の経験は、人生の次へのステージへのいざないと考えて、ゆっくり丁寧に歩いていけたらと思っている。そう『人生は続く』のだ。

